別紙3

第 18 回ヘブンアーティスト審査会　審査講評

東京都が指定した公園などの場所で音楽演奏やパフォーマンスを行うライセンスを交付するための審査、「ヘブンアーティスト審査会」も今回で18 回目を迎えました。

審査は、応募のあったパフォーマンス部門140組、音楽部門106組の合計246組について、DVDに収録された映像資料を中心に一次審査を行いました。審査委員の多くが、映像を見て何らかの魅力や独創性、将来性を感じ、観客を前にした実演を見てみたいと評価した、パフォーマンス部門40組、音楽部門20組の合計60組のアーティストが一次審査を通過しました。

二次審査として、一次審査通過アーティストに対し、実際に観客を前にした15分の実演を見て審査を行う公開審査会を平成30年9月26日から28日にかけて、池袋の東京芸術劇場の劇場前広場や雨天時には東京芸術劇場内のスペースで行いました。

最終合格者は、別紙のとおりとなりますが、実演を見た直後の審議を行う中で、次のようなコメントが挙げられました。部門別に抜粋します。

パフォーマンス部門において、合格点に達するようなアーティストの評価できる点としては、「ありがちな技であっても、組み合わせや、複数人での組技によって、工夫が凝らされていた」「小道具や衣装など、色を意識してコーディネートしたり、世界観を演出する材料とするなど、細やかな神経が行き届いている」「見せ方に限界があると思われがちな演目でも、少しでもその可能性を広げようとする努力や姿勢、思索の跡がうかがえる」「実演時間15分にあわせて構成をしっかり作り込んできており、細部まで神経を使う真面目な姿勢が見て取れる」「実演中ににじみ出る人間性に大いに魅力を感じる」「アーティストの特定の演目に対するこだわりが伝わり、それに対する深い愛も感じた」「技を失敗してしまったときにも、すぐ対応できる代わりのものを用意しておくなど、観客を待たせまいという姿勢に好感が持てる」「技を失敗してしまうこともあるが、あくまでそれが挑戦した結果であることが分かった」

一方で、あと一歩の所で届かなかったアーティストに対しては次のようなコメントが挙げられました。「技を失敗してしまった後、たまたま発してしまった一言をとっても、お客さんを前にしていることを意識してほしい」「ダンスやパントマイムなど、体の使い方の基礎を十分に勉強した上で、パフォーマンスに臨むことによって、今後大きく変わってくるものがある」「自分の演目は見せ方に限界があるから観客に伝わらないところがあっても仕方がないと世界を自分自身で狭めてしまっては、そこから先の可能性が見えずもったいない」「アーティストとしての実力は十分あるということは分かるが、あまりに失敗が多い場合は、審査会である以上、それで良しとすることは難しい」「パフォーマンスに演出要素が見られないのは残念。練習風景を見せられていた感じがした」「ショーとして再考すべきところがある。審査会は技の競技会とは違う。」「実演15分という時間を与えられながらあまりに早く終わってしまうと、実際にイベントや大道で公演する時に、与えられた時間に適したショーの組み立てができるのか不安になる」

音楽部門では、合格点に達するようなアーティストの評価できる点として、「観客を楽しませる構成が練られていた。また、そういう意図が汲み取れた」「技術の高さもさることながら、メンバーの間に実力差がなく、バランスが非常に良い」「あまり見たことがないような演目に、非常に高いオリジナリティがある」「かなり独特だが、忘れられないような良さや魅力がある」「一次審査の映像で見た時の印象よりかなり良かった」「観客に媚びるような様子もなく、ありのままの自分を表現している様に好感が持てる」「楽器に対するこだわりや情熱が大いに伝わった」「ちゃんと演奏することが出来た上で、それをわざと飛び越したような演奏をしているチャレンジングな姿勢が良い」

一方で、あと一歩というアーティストに対しては、「そつなく上手なのだが、無難という印象がある。真面目がゆえにつまらないということだろうか」「ミスをしてはいけないという気持ちが悪い方向に向かい、伝わるものが減ってきてしまっている」「演奏する自分たちの方向しか見えていない感じがある。観客から見られているという意識が足りないと思う」また逆の意見として、「観客に気を使いすぎていて、あざとさや媚を売っているような印象がある。自分が見せたいものを見せるべきではないか」というものもありました。

今回の審査会では、過去の審査会で合格を逃してしまったアーティストが、今回の審査会で改めて合格するケースがあり、そこでは過去の審査会からの大幅な進歩や発展、成長が評価のポイントとなっていました。あと一歩の所で合格を逃してしまったアーティストについて、今回の結果を受けても、小さくまとまらずに、またそこに留まらずに、より自分を磨いて前を向いてチャレンジしてほしいというのが審査委員の共通の思いとしてありました。

また、審査会の審議の中では、多角的な視野で審査し、多様性や希少性も審査で認められるべき価値ではないかという議論もありました。一見して、大道で活動することとの相性は未知数に見えるものの、あえて「他にはないこと」をやることに価値があるのではないか、また、そういった活動しているアーティストにも自分たちも是非やってみたいと思わせる呼び水になるのではという意見です。また、大道で活動することによって、子供たちと出会い興味を持ってもらえることがあれば、それは非常に意味があるのではないかという意見もありました。

この審査講評により、審査の基準がよく分からないというアーティスト、今後自分のどこを改善すればよいか分からないというアーティストに対して、今までになかった視点を提供することができれば幸いです。審査を通じて、関係するアーティストに少しでも成長してほしい、才能を伸ばしてほしいというメッセージを込めています。全てのアーティストに、今後のさらなる飛躍を期待しています。

ヘブンアーティスト審査会
審査委員長　森 直実
審査委員 （パフォーマンス部門） 芦部 玲奈、田中 未知子、乗越 たかお
（音楽部門） 梶 奈生子、湯浅 学